

三遊亭円朝速記本における尊敬語について —明治新語使用の意味とは？—

青 木 杏 佳

はじめに

三遊亭円朝の速記本には、物語の舞台が江戸時代であるのにも拘わらず、登場人物の会話に明治時代に一般的に使用されはじめた言葉が稀に見られる。これは、円朝自身が口演する際に聴衆に向けて言葉遣いを意識した、または、速記者が速記本を出版する際に改訂したことによる現象だと考えられる。

例えば円朝の速記本『怪談牡丹燈籠』には、明治時代に一般市民で使われるようになった書生語の「君」や「僕」が使用されている。これに関して、藤浦敦(1996)¹には、

円朝は新しい物が好きだったらしい。“累ヶ淵”にそのころ流行の“神経”と置いたくらいだからいろいろと新語を使っている。「牡丹燈籠」の山本志文や「江戸屋騒動」の倉岡元仲という医者に「君」や「僕」を使わしているが、これを私の祖父が聞くと、円朝は「(中略)それはお客様のなかに洋服をお召しになったハイカラのおひとをお見受け致しますときに用いました。するてえと、そのかたがたはニコニコしてましたよ」と語ったという。そして「古い噺の中に元のをこわさないように新しい言葉をはさみますてえとようがすな。ただし、あんまり新しがつてしまうと浮いてしまいます」といつて笑い、「ま、汁粉ン中へちよいと塩をひとつまみ落としますてえと甘い之余計になりやす、あれげすね」といった。

と述べている。つまり、明治語「君」と「僕」の利用は聴衆を意識した意図的なものであるということを円朝本人が告白しているのである。円朝が落語を演じていた明治時代は、言葉の変化が特に著しく、標準語の統制といった歴史的な動きもあったことから、新しく使われるようになった言葉所謂「新語」が多く現れた。そのため、この時期は新語にはとても敏感な時期であった。寄席の雰囲気に合わせて、わざと新語が使用されることは演者にとっても聴衆にとっても印象深く、特別なことであっただろう。

また、三遊亭円朝速記本は円朝の口演を速記者が速記し、それをもとに改訂したものである。よって、速記本を研究する際は、速記者による言葉の解釈が影響していることも視野に入れて考える必要がある。特に『怪談牡丹燈籠』は、出版に際し円朝以外の人物による補筆のあとが濃厚であり、速記本に見られる表現全てが円朝によるものではないということを考慮しなくてはならない。

本研究では、三遊亭円朝の速記本に尊敬語の新語が使用されているかを調査する。つまり、前述した「君」「僕」といった人称代名詞以外の新語利用の有無を明らかにする。注目する言語事象は、江戸時代が舞台となった作品中での尊敬語「お(ご)……になる」形式(以下「ご」を省略し「お……になる」形式とする)の使用である。

湯澤（1954）²では、「お……になる」形式は明治の新語として扱われている。この形式が円朝の速記本の中でどのくらい使用されているのか、またどのように使用されているのかを調査する。円朝速記本には、江戸時代一般的に使用された尊敬語の「お（ご）……なさる」形式（以下「ご」を省略し「お……なさる」形式とする）や「お（ご）……遊ばす」形式（以下「ご」を省略し「お……遊ばす」形式とする）が見られるため、この2つの形式と「お……になる」形式の比較が主となる。

結果の見通しとしては、「お……になる」形式の使用は人称代名詞の新語である「君」「僕」の使用同様に見られると推測する。また、その使われ方にも特徴があるのではないかと予想した。その特徴として「キャラ付け」という点に注目したい。これは役割語と似た部分がある。金水（2003）³は、役割語について、

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

と定義している。円朝は自身の作品で、明治語を発話する役割を持つ人物の選定、つまり、その人物へのキャラ付けを行っている。『怪談牡丹燈籠』で、作品中の風変わりで浮いた存在である太鼓医者の山本志丈に「君」「僕」を使用させた。これは山本志丈への軽薄な者・新しもの好きゆえの「新語利用者」というキャラ付けであると考えられる。今回の調査では、尊敬語「お……になる」形式の使用のキャラ付けが行われているのかを明らかにするために、「お……になる」形式の作品全体の使用率だけでなく、使用する人物やその人物の階層にも着目する。また、キャラ付け以外の観点にも触れ、どのような状況下で「お……になる」形式を使用しているのか明らかにしたい。

従来の日本語学における「落語（特に三遊亭円朝の落語）」の研究は、言文一致体⁴の成立に関して円朝の作品が注目されたことに始まる。円朝に代表される明治10年代後半から20年代の口演速記の資料的価値については、速記術の未熟さや速記記号による語形の統一などの面から、音韻資料・語法資料としては信頼度が低いという説が有力である。しかし、近年、落語の会話を疑似的な会話資料と見ることによる表現論・談話論からの分析といった新しい視点からのアプローチも生まれてきた⁵。これは、漫才などの話芸とともに、笑いを言語行動として分析しようとするもので、語用論・意味論ともかかわる。しかし、落語での言葉の使用のされ方を観察し、落語に使用される言葉の芸能語、舞台語としての特徴も踏まえることも必要であると考えられる。

また、落語という聴衆がいて成り立つ話芸だからこそ見られた演者のこだわりを新語の使用という視点から考えていきたい。そして、落語を研究する上での新たな視点となれば幸いである。

第一章 先行研究の紹介

本章では、江戸時代使用された尊敬語「お……なさる」形式、「お……遊ばす」形式、明治期の新語として扱われる「お……になる」形式について先行研究に触れながら確認していく。2つの先行研究に触れ、江戸時代の尊敬語について「お……になる」形式の立場について説明する。

1-1. 江戸時代の敬語の概観について

江戸語は、はじめは江戸の土地に住みついている人々の使用する言葉で関東言葉であった。関東言葉は敬語表現がきわめて乏しく、初期の江戸語には、それほど体系だった敬語表現はなかったものと考えられている。家康が入城した後には、江戸の外の様々な地域から江戸に入り込んだ人々により、多種多様な言葉が雑然と混在した。特に武士階層は上方語の影響が強い。やがて、これらの言葉について取捨選択がなされ、全体として一つまとまった形を成すようになった。敬語表現に関しては、十八世紀半ば頃から、主として商人・遊女・武士のことばを通じて、急速に上方語の敬語表現が流れ込んできた。文化・文政期には、上方語の敬語表現に加え、江戸独特な用法が生じ、江戸語の敬語体系が確立したのである。

江戸語の敬語表現について、田中（1973）⁶は「上方語に比べてみると、その第一の特徴は、接頭語『お（ご）』を用いた敬語表現が、しきりに使われることである」と述べているが、「お……なさる」形式、「お……遊ばす」形式は上方語の敬語としても使用されていたらしい。田中（1973）による上方語と江戸語の尊敬の補助動詞の分類は以下の通りである。

〈上方語 最も敬意の高い場合の言い方〉

オ～アソバス・アソバサレマス・オ～ナサレマス・ナサリンス

（廓）・サセタモウ・テクダサレマス

〈上方語 普通の敬語にみられる言い方〉

オ～ナサル・ナサル・アソバス・タモウ・テクダサル

〈上方語 ごく軽い敬意のある場合の言い方〉

オ～アル

〈江戸語 最も敬意の高い場合の言い方〉

オ～ナサイマス・ナサイマス・オ～アソバシマス（女）・デイラッシャイマス・テイラッシャイマス・テゴザリマス・テクダサイマス・サッシャリマス・アソバシマス・オ～ニナリマス

〈江戸語 普通の敬語表現にみられる言い方〉

ナサル・オ～ナサル・アソバス・テゴザル・テイラッシャル・デイラッシャル・タモオ・テクダサル・サッシャル・～サッシ・オ～ヤル・オ～ニナル

〈江戸語 ごく軽い敬意のある場合の言い方〉

メサル・ナセエ

補足として、上方語の男性語における「オ～ナサル」は、かなり高い敬意が認められるとある。

1-2. 尊敬語の新語「お……になる」形式について

「お……になる」形式の先行研究としては辻村（1968）がある。辻村はまず、今泉（1939）、湯澤（1929）を紹介しつつ、これに批判を加えている。まず今泉については、今泉の指摘する『延慶本平家』の例が「今日のものと直結するには遠」として、院政鎌倉期の発生説を否定する。湯澤については、湯澤の指摘する和泉流絵入狂言記や『鶴龜室の梅』（天明九・1789）の例が「校訂者の読みあやまり」とする。そして辻村自身は「お……になる」が江戸時代末期以降のものとする。なお先頭で紹介した田中（1973）も、〈江戸語 普通の敬語表現にみられる言い方〉における「お……になる」について、この辻村の見解を踏まえ、「天保期ごろから、稀にみられるのみ」と追記している。

辻村の論を要約すると以下の通りである。

「お……になる」形式は江戸時代も極めて末期に至ると日常の会話にも段々と用いられた。また、この言い方は、当時の江戸町人、それも豪商と言われるほどの人達の家庭、及びそれをめぐる社会層において多く用いられたと想像できる。

明治期の小説では、末広鉄腸『雪中梅』（明治19年）といった政治小説に見られる。しかし、坪内逍遙『当世書生気質』（明治18年）には少ししか現れず、二葉亭四迷『浮雲』（明治20～22年）には全然見えず「お……なさる」「お……だ」表現が主流であった。同じ二葉亭四迷でも『浮草』（明治30年）では「お……になる」形式を使用している。二葉亭四迷は「お……になる」形式を当時としてはまだ新しく江戸っ子のすっきりした言い方になっていなかったことを嫌ったのではないかと推察される。

したがって、「お……になる」形式は一応、江戸時代末期に一つの尊敬表現の様式として完成された。明治20年頃を境としてその使用率は急上昇を示す。ちょうど円朝の落語速記本が出され始める明治10年代後半では、旧来の「お……なさる」に代わる新しい表現として広く認識され始めていたことだろう。更に30年から40年頃を近づくと江戸語とは違った東京語の姿が完成されていくと同時に、この形式も新しい共通語として益々一般化して今日に至ったのだと思われる。

以上が辻村（1968）における「お……になる」の要約である。

1-3. 先行研究より

本研究で扱う尊敬語について確認する。「お……なさる」形式と「お……遊ばす」形式は上方敬語の段階から使用されていた尊敬表現であり、「お……なさる」形式はごく普通の敬意を示す場合に、「お……遊ばす」形式は最も敬意の高い場合に使用する尊敬語であった。

「お……になる」形式について、この表現は明治期の新語と言われてはいるが、その発祥は江戸時代後期、江戸語が生まれた時期である。上方語として使われた「お……なさる」形式、「お……遊ばす」形式よりは新しい表現ではあるが、江戸時代発祥であることを確認しておきたい。

しかし、辻村（1968）でも述べられているように、この形式が実際使用されたのは明治に入ってからである。また、明治初期（明治30年頃まで）の小説では作者や作品によって「お……になる」形式の使用の差が見られた。二葉亭四迷のように、新語「お……になる」形式を初期の作品ではあまり好んで使用しなかった文豪もいた。これを踏まえ、円朝は新語「お……になる」形式を好んで使用したのか、また、特定の作品に多用したのかを次章から考察していく。

第二章 「お……になる」形式の使用率

2-1. 調査資料・調査項目

尊敬語の新語「お……になる」形式の使用について、以下にあげる三遊亭円朝速記本3作品と明治の小説1作品を調査する。

・三遊亭円朝速記本

『怪談牡丹灯籠』 初出 明治17年（1884）7月～12月

速記者 若林珣蔵 酒井昇造

『敵討札所の靈驗』 初出 明治20年（1887）6月～9月

速記者 小相英太郎

『文七元結』 初出 明治22年（1889）4月～5月

速記者 酒井昇造

・明治期の小説

末広鉄腸『雪中梅』 初出 上編＝明治19年（1884）8月、下編＝同年11月

円朝速記本は、舞台背景が江戸時代で初出が明治時代の3作品を選定した。これらはあまり新語「お……になる」形式の使用が実際には見られないであろう江戸時代を描いた作品であり、口演されたのは明治期である。初出は「お……になる」形式が一般化される明治30年以前である。3作品それぞれにどの程度の新語「お……になる」形式の使用が見られるか調査する。使用の比較として、「お……なさる」形式と「お……遊ばす」形式の使用も調べる。

小説は、「お……になる」形式が積極的に使用されていると辻村（1968）で挙げられていた末広鉄腸の政治小説『雪中梅』を円朝速記本との比較対象として調査する。この作品は、「お……になる」が使用されている明治の作品の代表として扱うものである。

以上あげた4作品は、『円朝全集』（岩波書店）、『政治小説集 一 新日本古典文学大系 明治編』（岩波書店）をテキストとして使用した。

4作品の本文の会話文に見られる尊敬語を採集し、用例数を比較する。抜き取る尊敬表現は尊敬語の補助動詞「お……になる」形式「お……なさる」形式「お……遊ばす」形式の3つである。「……」の部分は、動詞であり「お歩きになる」「お歩きなさる」「お歩き遊ばす」といった表現を採集する。

採集にあたっての注意点として、「勉強する」「活躍する」等の漢語サ変動詞の敬語形「お勉強になる」「お勉強なさる」「お勉強遊ばす」等は採集しない。「御免なさい」「御免遊ばせ」などの挨拶語や「お呉れになって」「お遣りになって」といった遣りもらい表現は、挨拶表現・依頼表現の定型化したものであるため、調査対象から除外する。ただし遣りもらいとは別の、〈行為を行う〉の意味の「遣る」はカウントする。また、「御覧なさい」「御覧遊ばせ」などの命令系のものも働きかけの表現として定型化されたものである。そのため、命令表現「お……なさい」「お……遊ばせ」は調査の対象外としてカウントしないものとした。

2-2. 調査結果

円朝速記本3作品と明治の小説『雪中梅』の、「お……になる」形式「お……なさる」形式「お……遊ばす」形式の用例数とその割合を表にまとめている。

表1 〈円朝速記本3作品と『雪中梅』における尊敬形式の使用割合〉

	「お……になる」形式	「お……なさる」形式	「お……遊ばす」形式	合計
怪談牡丹燈籠(明17)	40	41	27	108
	37.04%	37.96%	25.00%	100%
敵討札所の靈験(明20)	17	44	15	76
	22.37%	57.89%	19.74%	100%
文七元結(明22)	1	10	0	11
	9.09%	90.91%	0.00%	100%
雪中梅(明19)	35	27	0	62
	56.45%	43.53%	0.00%	100%

「お……になる」形式の使用数は、『雪中梅』が56.45%と一番多く、次いで『怪談牡丹燈籠』37.04%、『敵討札所の靈験』22.37%、『文七元結』9.09%という結果になった。

『雪中梅』は当時の自由民権運動を背景とする政治小説であるため、時代背景は明治期である（「発端」の章では、日本の国会が開設された150年後の明治173年を舞台にしているが、少なくとも江戸時代の言葉は使用されないだろう）。そのため、「お……になる」形式の使用割合が一番高い結果となるのは妥当な結果である。辻村（1968）でも、『雪中梅』での「お……になる」形式の利用について、『お……なさる』式の言い方がかなり優勢ではあるとしても（中略）この辺に『お……になる』形式一般化の第一段階を認めても良いようである。」と述べている。更に今回の調査で「お……になる」形式の使用の優勢が見られたため、明治二十年代前後での「お……になる」形式の使用率増加の妥当性を認めることができる。

円朝速記本では3作品とも舞台背景が江戸時代の作品にも拘わらず、明治の新語「お……になる」形式を積極的に使用していることが分かった。しかし、明治を舞台とした小説『雪中梅』より使用率が低いことや、江戸時代一般的に使用されていた「お

……なさる」形式、「お……遊ばす」形式の方が優勢であることから舞台背景の時代を加味しているとも考えられる。また、円朝速記本3作品の中で、年代が進むに連れて「お……になる」形式の使用率が上がるのではなく、一番初出が早い『怪談牡丹燈籠』が他2作品よりかなり使用率が高い結果となった。

以上の結果より、円朝の新語「お……になる」形式の使用に関して2つのことが考えられる。1つ目は、円朝は新語の利用に対し肯定的だったということである。聴衆を常に意識し新語を取り入れることを怠らなかったのか、今回調査した3作品とも「お……になる」形式の使用が見られた。また、むやみに使用するのではなく程よく取り入れたことが、『雪中梅』より使用率が上回らなかったという結果から読み取ることができる。一番使用割合の高い『怪談牡丹燈籠』でもその使用率は半数には満たず、江戸時代一般的に使用された「お……なさる」形式と「お……遊ばす」形式の使用の方が多く優勢である。

2つ目は、新語の使用量が作品によって差が見られることである。辻村(1968)で、「お……になる」形式について「明治20年頃を境としてその使用率は急上昇を示し」とあるので、20年以降の作品に使用が多く見られると予想していたが、明治17年初出の『怪談牡丹燈籠』の使用率が最も高いという結果になった。『文七元結』に関しては、短編の作品で元々尊敬表現使用の母数が少ないことも新語の使用数の少なさに影響するかもしれないが、『敵討札所の靈驗』と『怪談牡丹燈籠』を比較しても、時代が進むことで新語が実際に使用されはじめたために使用率を上げるのではなく、それぞれの作品の作風を考慮しているのではないかと推測できる。落語の中でも、『怪談牡丹燈籠』と『敵討札所の靈驗』は「怪談噺」「仇討物」の類であり、新語の使用率が低い『文七元結』は「人情噺」の類である。このような作風や、登場人物で新語の使用の割合が左右されると予想する。作風や登場人物の新語「お……になる」形式の使用については第三章で詳しく述べようと思う。

第三章 円朝作品に見られる「お……になる」形式の使用

第二章では、「お……になる」形式の作品ごとの使用率について考察した。第三章では、「お……になる」形式の使用のされ方について考察する。具体的には、どのような動詞に「お……になる」形式が使用されているのか、また、「お……になる」形式の使用や性差や階層差があるのか、そして、「君」「僕」のように「お……になる」形式使用のキャラ付けはされているのかという点に注目して考察していく。

3-1. 「お……になる」形式が使用される動詞について

円朝速記本3作品に見られる尊敬語「お……になる」形式がそれぞれどのような動詞に使用されているかを以下の表にまとめた。表では、「お……になる」形式が使用されている動詞とその回数をまとめている。

表 2-1 〈『怪談牡丹燈籠』における「お……になる」形式が使用される動詞〉

動 詞	回 数	動 詞	回 数
帰る	12	しずまる	1
かくれる（亡くなるの意）	4	好く	1
出る（来るの意）	4	出掛ける	1
出る（行くの意）	3	出る（出るの意）	1
やすむ（寝るの意）	3	取り極める	1
立つ（出るの意）	2	取捨てる	1
出る（おいでになるの一部、居るの意）	2	用いる	1
上がる	1	分かる	1
移る	1	合 計	40

表 2-2 〈『敵討札所の靈験』における「お……になる」形式が使用される動詞〉

動 詞	回 数
帰る	5
抱える	4
かくれる（亡くなるの意）	2
調べる	2
出る（来るの意）	1
歩く	1
取り立てる	1
泊まる	1
合 計	17

表 2-3 〈『文七元結』における「お……になる」形式が使用される動詞〉

動 詞	回 数
話す	1
合 計	1

『怪談牡丹燈籠』では 17 種類の動詞に、『敵討札所の靈験』では 8 種類の動詞に、『文七元結』では 1 種類の動詞に「お……になる」形式を使用していた。これは、「お……なさる」形式に比べると、少ない種類の動詞に限定して使用されている印象を受けた。「お……なさる」形式は元々使用される回数が一番多い形式ではあるが、使用される動詞は「お……になる」形式の 2～3 倍多い数の動詞に使用されていた。

ここで注目したいのが、『怪談牡丹燈籠』と『敵討札所の靈験』では「帰る」という動詞に最も多く使用されているという点である。また、「帰る」をはじめとして「出る（来るの意）」「出る（行くの意）」「立つ（出るの意）」「移る」「出掛ける」「出る（出るの意）」「歩く」といった“移動を表す動詞”が多いように感じた（表の“移動を表す動詞”には網掛けをした）。以下、“移動を表す動詞”について「お……になる」形式の使用例を紹介する。

〈使用例〉

- ・ 帰る
「旦那様、孝助様が御帰りにになりました」（怪談牡丹燈籠）
「本意を遂させしと云て御帰りになれば」（敵討札所の靈驗）
- ・ 出る（来るの意）
「今日は相川様の所へ孝助の結納で御出に成りますそうですが」（怪談牡丹燈籠）
- ・ 出る（行くの意）
「弥よ明日は釣にお出になるお約束日ゆゑ」（怪談牡丹燈籠）
- ・ 立つ（出るの意）
「貴郎がお立になつてからといふものは」（怪談牡丹燈籠）
- ・ 移る
「牛込から此処へ御引き移りになしまして」（怪談牡丹燈籠）
- ・ 出掛ける
「私は昨晚旦那様の御出立に成る処を夢に見ましたが」（怪談牡丹燈籠）
- ・ 歩く
「彼方此方とお歩行に成つてお帰り遊ばしても」（敵討札所の靈驗）

『怪談牡丹燈籠』では 40 例中 24 例（60.00%）、『敵討札所の靈驗』では 17 例中 7 例（41.18%）、約半数が“移動を表す動詞”に「お……になる」形式が使用されていることが読み取れる。このことから、「お……になる」形式を円朝が使用する際に、わざと移動や移動している状態を表す場面で使用していたのではないか、または、「お……になる」形式が“移動を表す動詞”によく使用される尊敬語の形式なのではないかと推測できる。

そこで、円朝速記本との比較対象として明治期の政治小説『雪中梅』ではどのような動詞に「お……になる」形式が使用されているか、次ページの表にまとめた。また、“移動を表す動詞”は網掛けをしており、使用例も紹介する。

表 3 〈『雪中梅』における「お……になる」形式が使用される動詞〉

動 詞	回 数	動 詞	回 数
帰る	5	持つ	1
出る（来るの意）	4	目覚める	1
出る（行くの意）	3	泊まる	1
渡す	2	立ち寄る	1
頼む	2	尋ねる（来るの意）	1
聞く	2	蔑む	1
かくれる（亡くなるの意）	2	隠す	1
分かる	1	書き置く	
覧（みる）	1	送る	1
読む	1	起きる	1
呼ぶ	1	上がる（移動）	1
		合 計	35

〈使用例〉

- ・ 帰る
「君が御帰りになつたと云ふことだから」
- ・ 出る（来るの意）
「貴君は宇都宮へお出でになつて居まして」
- ・ 出る（行くの意）
「秋野さんも誰れかと新橋へお出でになつて居りまして」
- ・ 立ち寄る
「門口までお立寄りになりました」
- ・ 尋ねる（来るの意）
「ソシテ先日でも川岸さんが御尋ねになりました」
- ・ 上がる（移動）
「イ、エ木賀へ御上りになりましたが」

『雪中梅』では、35例中15例（42.86%）“移動を表す動詞”が見られた。『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』同様に「帰る」という動詞に5例と一番多く使用されている。また、「御出になる（行くの意）」「御出になる（来るの意）」といった尊敬の表現は、円朝の落語と『雪中梅』で共通して使用されている。この結果から、“移動を表す動詞”に「お……になる」形式を使用するのは円朝のこだわりによる裁量ではなく、「お……になる」形式の特徴だと考えるのが妥当だろう。

「お……になる」形式と「移動を表す動詞」には何か結びつきがあるように感じる。原口(1974)⁸では、辻村(1968)に続いて行った自身の「お……になる」形式の研究の中で幕末の女房日記の文章語の中に、動詞「なる」の形式化が見られると考察している。「なる」の形式化について、『なる』が『行く』『来る』の意味の敬語動詞として用いられたものから形式化してゆく過程がある」と述べられている。幕末の女房日記『中山續子日記』、『押小路甫子日記』の文章語には「庭へ御覧二成」「御同様准后様え御参り二成」といった助詞「へ」に後接しており、これは、「なる」に移動の実質的意義があって形式化していないものの例である。また、「今日申刻よりしはし御逗留に成らせられ候」といった「今日申刻よりしはし」の連体修飾語が付き「御逗留に成」が一体化した動作表現と見なすことができる例もある。このような用例を踏まえて、原口(1974)は『『お——になる』型の尊敬表現の形成の一因に、移動の実質的意義をもった『お——になる』の形式の先行が考えられるのである。』と述べている。したがって、「なる」は元々移動の実質的意義を持っており、「お……になる」形式が「移動を表す動詞」に多く使用されることに影響しているのではないかと推測できるのではないか。

また、湯澤 (1954)⁹ には江戸時代一般的に使用されていた敬語表現として、「行く」「出かける」の敬語、「来る」の敬語、「居る」の敬語の3つの意味を持つ敬謙動詞「おいでなさる」「おいで遊ばす」が載っており、定型化された形として存在している。湯澤 (1954) によると、『おいでなさる』『おいで遊ばす』は、『おいで』に

敬語の動詞『なさる』『遊ばす』の付いたものであるが、ここは各一語として取扱う。」とある。つまり敬讓動詞は、今回調査している尊敬表現の補助動詞の「お+動詞+になる」形式と捉えることも可能ではあるが、その語一つで尊敬語として扱うことのできる表現である。「出る（来るの意味）」「出る（居るの意味）」の動詞に使用する「お……になる」形式「お出になる（おいでになる）」は、「おいでなさる」「おいで遊ばす」と同様の意味を持つ定型化された表現であると考えられることのできるものである。

以上のことから、「移動を表す動詞」と「お……になる」形式には強い結びつきがあると考えられる。円朝の速記本3作品、『雪中梅』共に、「移動を表す動詞」に使用された「お……になる」形式が多く見られたのは、「お……になる」形式が使用されるにあたって「なる」の形式化が関わるという前提がある、または、「お出になる（来るの意味）」は定型化された敬讓動詞として確立していたためだと推測できる。

円朝は「お……になる」形式を使用する動詞について、当時「お……になる」形式で使用しても違和感の無い動詞を選定し使用していたと考えられる。新語を取り入れる際のその使用方法には円朝の慎重が見られる。

3-2. 「お……になる」形式の使用者について

円朝速記本3作品について、それぞれどのような人物が新語「お……になる」形式を使用しているのか調査した。この調査から、使用している人物の性別や階層に偏りがあるのか考察する。以下の表は、円朝速記本の作品ごとにおける尊敬語「お……になる」形式、「お……なさる」形式、「お……遊ばす」形式の使用者と使用した回数をまとめたものである。

また、「お……なさる」形式には「なさる」が転化した形の「お……なはる」形式¹⁰も含めており、「お……なはる」は〈〉内の回数で示した。

表 4-1 〈『怪談牡丹燈籠』の尊敬語使用者〉

使用者	「お……になる」形式	「お……なさる」形式	「お……遊ばす」形式
相川新五兵衛	7	4	
飯島平左衛門	1	1	
おきみ			2
お国	5	1	3
お米	1	3	11
お露			1
お徳	2	1	3
お峰		2	
藤村屋新兵衛	1		1
宮野辺源治郎	1		
源助		1	
相川孝助	9	12	4
五郎三郎	3	4	

善蔵	2	1	
伴蔵	2	4	
中助		1	
相川家の婆	2	1	1
萩原信三郎		2	1
山本志丈	1	2	
白翁堂勇斎	1		
りゑ	2	1	
合 計	40	41	27

表 4-2 〈『敵討札所の靈験』の尊敬語使用者〉

使用者	「お……になる」形式	「お……なさる」形式	「お……遊ばす」形式
お梅		2	
お金	2	1	5
お継		4	1
お照		3	1
男(藤屋の下男)		2	
お山		4	3
清兵衛(薬屋)	1		
小僧(お梅の朋輩(遊女))		1	
中根善右衛門の妻	1		1
武田重二郎	1		
伝次		2	
伝助	3		1
中村久治	3		
婆(増田屋)		〈2〉	
婆(又九郎の妻)		1	
正太郎	1		
藤屋七兵衛		4	
又九郎	1	9	
又市		2	
万助		1	
水島太一(白島三平)	2	1	1
山之助	2	3	1
若い衆		2	1
合 計	17	44	15

表 4-3 〈『文七元結』の尊敬語使用者〉

使用者	「お……になる」形式	「お……なさる」形式
又七	1	3
卯兵衛		4
内儀		2
藤助		1
合 計	1	10

3-2-1. 新語使用者の性別と階層

『怪談牡丹燈籠』では、「お……になる」形式使用者が15人、「お……なさる」形式使用者が16人、「お……遊ばす」形式使用者が9人である。『敵討札所の霊験』では、「お……になる」形式使用者が10人、「お……なさる」形式使用者が17人、「お……遊ばす」形式使用者が9人である。『文七元結』では、「お……になる」形式者が1人、「お……なさる」形式使用者が4人である。「お……遊ばす」形式は、女性が多く使用するという性質を持っていることもあり、使用者は少数である。一方、「お……になる」形式は、「お……なさる」形式には少し劣るが、幅広い登場人物に使用されているのではないだろうか。

次に、「お……になる」形式の使用者に性差や階層差があるか細かく考察していく。3作品での「お……になる」形式の使用者の性別、階層（職業や作中での立場）をそれぞれまとめたのが以下の表である。

表 5-1 〈『怪談牡丹燈籠』の「お……になる」形式使用者〉

	性別	階層（職業）
相川新五兵衛	男	武士
飯島平左衛門	男	武士
お国	女	飯島の妻
お米	女	飯島家の女中
お徳	女	愛川家の娘
藤村屋新兵衛	男	刀屋、商人
宮野辺源治郎	男	武士
相川孝助	男	下男
五郎三郎	男	下男
善蔵	男	下男
伴蔵	男	萩原家で雑用をする貧乏人
相川家の婆	女	相川家に仕える婆
山本志丈	男	太鼓医者
白翁堂勇斎	男	八卦見
り糸	女	孝助の母（元浪人の妻）

表 5-2 〈『敵討札所の靈驗』の「お……になる」形式使用者〉

	性別	階層（職業）
お金	女	中根家の女中
清兵衛（薬屋）	男	商人
中根善右衛門の妻	女	善右衛門の妻
武田重二郎	男	中根家の養子
伝助	男	武田家の下男
中村久治	男	足輕
正太郎	男	左官
又九郎	男	宿泊所の爺さん
水島太一（白島三平）	男	元榊原藩、按摩
山之助	男	白島三平の息子

表 5-3 〈『文七元結』の「お……になる」形式使用者〉

	性別	階層（職業）
文七	男	近江屋（鼈甲問屋）の奉公人

表 5-1、表 5-2、表 5-3 より、「お……になる」形式の使用者の性別は『怪談牡丹燈籠』は男性10人女性5人、『敵討札所の靈驗』は男性8人女性2人、『文七元結』は男性1人である。男性による使用が多い。しかし、元々の登場人物に男性が多いことを考慮すると、女性も複数人使用していることから、明確に性別での偏りは無いのはいか。また、階層（職業や作中での立場）に関しても、「相川」「飯島」といった武士、「孝助」「伝助」といった下男、八卦見や足輕、按摩など、様々な階層や職業の人々が使用している。よって、性差や階層差による「お……になる」形式の使用の偏りは無く、特定の層に固執しての使用は無いと考えられる。

3-2-2. キャラ付けの有無

『怪談牡丹燈籠』で、書生語の「君」「僕」を使用したのは太鼓医者の山本志丈である。これは円朝が口演する際に、作品中の風変わりて浮いた存在である太鼓医者の山本志丈に「君」「僕」を使用させた。私は、これを山本志丈への新語利用者というキャラ付けであると考えた。

今回の調査によると、『怪談牡丹燈籠』における新語「お……になる」形式の使用者は、「相川」「飯島」「お国」「お米」「お徳」「刀屋の亭主」「源次郎」「孝助」「五郎」「善蔵」「伴蔵」「相川家の婆」「山本志丈」「勇斎」「りゑ」の15人である。尊敬語使用者21人中の15人であるため、「お……になる」形式の使用者は多いと解釈できる。物語の主人公「孝助」が9回と最も多く使用しており、孝助への新語利用のキャラ付けが考えられるが、2番目に多く使用しているのが「相川」の7回であることから、特に「孝助」に多用させているとはいえないだろう。また、山本志丈の「君」「僕」の使用は萩原との会話ばかりに使用されているのに対し、「お……になる」形式は色々な場面

で汎用的に使用されている様子が見える。「君」「僕」のような書生語は、萩原のような知識人にしか通用しないが、「お……になる」形式は誰が使用しても通じる表現であったのだろうか。

『敵討札所の靈驗』においても、「お金」「清兵衛（薬屋）」「善右衛門の妻」「武田重二郎」「伝助」「中村久治」「正太郎」「又九朗」「水島太一（白島山平）」「山之助」の11人が使用している。噺の肝となる悪党の「又市」が使用していないことや、物語ではあまり登場場面の多くはない「伝助」や「正太郎」が使用していることから、特定の人物へのキャラ付けがされているとは考えにくい。

『文七元結』に関しては、「お……になる」形式の利用者は、作中の重要人物「文七」に限定されている。しかし、使用が一度のみであることから、キャラ付けがされているという裏付けには弱いと考えた。

以上のことから、新語「お……になる」形式に関しては新語利用のキャラ付けは行われてはいないのではないかと考えられる。

したがって、新語利用者の性別や階層には特に偏りや特徴が見られなかった。また、「君」「僕」のように特定の人物への「お……になる」形式利用のキャラ付けも見られなかった。このことから、「お……になる」形式に関しては、後に明治に統制される標準語として、性差・階層差に関係なく使用される言葉であるため、噺の中でも登場人物へのキャラ付けを意識することは無かった、あるいは、あえて色々な人物に使用させていたのではないかと考える。

3-3. 「仇討物」と「人情噺」という作風による新語使用率の違い

『怪談牡丹燈籠』や『敵討札所の靈驗』に「お……になる」形式が多く使用され、『文七元結』にはあまり使用されなかったのは何故だろうか。私は、作風の違いが一番の原因なのではないかと考える。

『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』と『文七元結』の作風の違いは明確である。

『怪談牡丹燈籠』は、主人公孝助の父親である黒川孝蔵が飯島に無礼討されたことが発端となった「仇討物」である。また、恋煩いで亡くなったお露とその女中のお米が幽霊となって萩原の所に現れるという「怪談噺」の要素も含まれる。登場人物は、武士や町人などが多く、和尚や太鼓医者といった特徴的な人物も登場する。

『敵討札所の靈驗』は、共通の悪党水司又市に親や兄弟を殺された登場人物達が協力して仇を討とうと立ち向かう「仇討物」であり『怪談牡丹燈籠』と噺の傾向は類似する。また、登場人物間での恋愛や生き別れた肉親との再会など感動的な場面も多くある。登場人物は、武士や百姓、和尚や遊女などがいて、様々な階層の人物が関わりあう作品である。

『文七元結』は、左官の長兵衛が自分の博打のせいで身を吉原に売った娘お久のお金百両を、見ず知らずの文七にあげてしまうことによって展開される話である。結末では、百両も長兵衛の元へ戻り、文七とお久が元結屋を開き大団円を迎える。登場人物は、左官や鼈甲屋といった町人や遊女で比較的平和な日常を描いた「人情噺」である。『怪談牡丹燈籠』と『敵討札所の靈驗』の2作品は「仇討ち」が主題となっており、『文

七元結』は日常の描写が主題となっている。また、『怪談牡丹燈籠』は特に「怪談噺」の要素もあり、幽霊の登場という非現実的な場面がある。『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』2作品に共通するテーマは「仇討ち」と「暴力描写」であるが、『怪談牡丹燈籠』の内容に関して須田（2017）¹¹では、「円朝は寄席という大衆文化の空間に座り続け、慾の否定、忠義・義理・誠実という生き方を人びとに語っていったのである。そこに文明開化という状況（構造）が立ち現れ、明治政府の国民教導という“呼びかけ”によって円朝の主体は喚起され、自己実現を企図する中で覚醒し、幕末に創作した『怪談牡丹燈籠』に手を入れ、そこにもともとあった規範・教諭色の傾向を一層強めていったのではないだろうか。」と述べられている。確かに、『怪談牡丹燈籠』では、悪徳な人物「お国」「源次郎」に対し「孝助」、『敵討札所の靈驗』では、酷い人殺しの「水司又市」に対し「お継」といった誠実で善い人を置くという二項対立を実現させ、勧善懲悪と忠義・義理をテーマに噺が組み立てられている。また、『怪談牡丹燈籠』の「怪談噺」要素に関しては、須田（2017）で「幽霊・憑依といった怪異の語りは、物語を潤色し、客を惹きつける手段として用いられているのに過ぎないのである。」と批評されている通り、噺を盛り上げるための道具程度の存在であるようだ。円朝にとって「仇討物」を口演する目的は、口演当時の人々、つまり明治初期を生きる聴衆への教諭である。そのため、江戸ではなく明治観客を主体として、より意識するのではないか。観客への意識があればある程、観客が使用しはじめた言葉、所謂明治期の新語の混入が行われるのも自然である。

須田（2017）では、『文七元結』の批評の中で「悪と暴力が出揃う『怪談牡丹燈籠』『真景累ヶ淵』などに比べ、『文七元結』は円朝作品のなかで異質である。噺に「悪党」は誰一人として登場しない。ゆえに暴力描写（人殺し）はなく、恨みを抱いた怨霊や、仇討ちの場面もなく、当然ながら勧善懲悪としての結末とはならない。」と述べている。父親のために吉原の角海老に身を売ったお久の親を思う気持ち、親子の愛情に心動かされ長兵衛が百両を返すまでお店にお久を出さないと言った角海老の内儀の優しさ、百両を失くしてしまったと川に身投げしようとする文七に身売りしたお久のお金百両を渡してしまう長兵衛の心意気、これらの全てが義理深い、人情に厚い江戸っ子らしさが表れているとを感じる。

したがって、「円朝自身が何を目的に口演するか」という点が、明治期の新語「お……になる」形式の使用の割合に大きく影響することが考えられる。『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』は「仇討ち」を主題としており、口演当時の人間にも通じる悪の否定や義理・人情といった勧善懲悪を伝えた。また、『怪談牡丹燈籠』は噺を盛り上げるために、幽霊というどちらかというと非日常的な空想世界が盛り込まれているため、当時の世の中を写すにはリアリティに欠ける。江戸の世の中の様子の反映には重きを置いてはいないのであらうと考えられる。したがって、新語の「お……になる」形式を多く取り入れても物語の雰囲気は崩れることは無い。または、江戸時代という雰囲気を多少崩すことを問題とはしていないのではないか。一方、『文七元結』は、江戸っ子の生き様をよりリアルに演じることが目的であり、円朝は「長兵衛」「お久」「角海老の内儀」「文七」といった江戸っ子らしさ溢れる人物たちを精一杯演じたであ

ろう。そのためには、江戸言葉を忠実に使用することが求められるのである。よって、新語の混入がほぼ無いのである。

このような、噺の作風の違いは新語の混入に影響しているのではないか、特に、『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈験』と『文七元結』といった明らかに雰囲気が違う作品では新語混入の差が顕著に表れているのではないかと思う。

最終章 調査を踏まえて考える新語の混入の意味について

以上、三遊亭円朝の速記本に見られる明治期の新語に関して調査した。調査する中で、「円朝は『お……になる』形式の使用に肯定的か」「『お……になる』形式の使用には何か特徴が見られるのか」の2点に注目した。

円朝速記本3作品全てに、明治の新語である「お……になる」の使用が認められる。円朝はこの表現の使用に肯定的だったことがわかる。また、明治時代を舞台とした政治小説『雪中梅』の使用率56.45%より円朝速記本の使用率が低いことから、噺の舞台背景を完全に無視するのではなく、丁度良い塩梅で使用していることも分かった。これは、円朝が物語の時代背景が江戸時代であることを考慮し、江戸語的要素を壊さないように注意したためであると考えられる。まさに序章で紹介した円朝本人の告白「古い噺の中に元のをこわさないように新しい言葉をはさみますてえとようがすな。ただし、あんまり新しがつてしまうと浮いてしまいます」「汁粉ン中へちょいと塩をひとつまみ落としますてえと甘い之余計になりやす、あれげすね」（藤浦敦（1996））という表現が適切である。

また、新語の混入に関して特徴が見られた。円朝の落語速記本には、書生語「君」「僕」と、今回調査した「お……になる」形式の混入が見られることが現段階で明らかになっている。同じ新語の混入でも、「君」「僕」（『怪談牡丹燈籠』で見られる）と「お……になる」形式（『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈験』『文七元結』で見られる）では混入の仕方が違っている。書生語「君」「僕」は、新語利用者というキャラ付けがなされていた。これは、円朝が口演している際に聴衆にハイカラな人を見かけて取り入れた新語であるが、あえて使用しても違和感のない人物を選定して使用させたと推測する。

新語「お……になる」形式の混入に関して、この形式が使用される動詞は“移動を表す動詞”に固執していることが分かった。これは、円朝のこだわりではなく「お……になる」形式の語史的な部分が大きく関わる。原口（1974）では、幕末の女房の日記に見られる「お……になる」形式の研究の中で、「『お——になる』型の尊敬表現の形成の一因に、移動の実質的意義をもった『お——になる』の形式の先行が考えられるのである。」と述べている。「なる」は元々移動の実質的意義を持っており、「お……になる」形式が“移動を表す動詞”に多く使用されることに影響しているのではないかと考えた。また、湯澤（1954）には、江戸時代一般的に使用されていた敬語表現として、「行く」「出かける」の敬語、「来る」の敬語、「居る」の敬語の3つの意味を持つ敬譲動詞「おいでなさる」「おいで遊ばす」が載っており、今回調査している尊敬表現の補助動詞の「お……になる」形式も「お出になる（おいでになる）」

に限定して、その語一つで尊敬語として扱うことのできる表現であると考えた。これらの事例から“移動を表す動詞”と「お……になる」形式には強い結びつきがあると考え、新語「お……になる」形式を使用する動詞は“移動を表す動詞”に固執していることの裏付けとした。円朝は、「お……になる」形式の特徴を踏まえ、忠実に使用していたと考えた。

次に、「お……になる」形式について、「君」「僕」のように、特定に人物へのキャラ付けがされているのか、使用者の性別や階層に偏りがあるのか、作品ごとの使用者を挙げ、特徴を細かく調べてみた。明確に性別での偏りは見られず、階層（職業や作中での立場）に関しても、「相川」「飯島」といった武士、「孝助」「伝助」といった下男、八卦見や足輕、按摩など、様々な階層や職業の人々が使用していたため、特定の層に固執しての使用は無いと考えられる。また、『怪談牡丹燈籠』における新語「お……になる」形式の使用者は、尊敬語使用者 21 人中 15 人と多く、山本志丈の「君」「僕」の使用は萩原との会話のみに限定して使用されているのに対し、「お……になる」形式は色々な場面で汎用的に使用されている様子が見える。『敵討札所の靈驗』においても、噺の肝となる悪党の「又市」が使用していないことや、物語ではあまり登場場面の多くはない「伝助」や「正太郎」が使用していることから、特定の人物へのキャラ付けがされているとは考えにくい。以上のことから、新語「お……になる」形式に関しては新語利用のキャラ付けは行われてはいないという結果に至った。このことから、「お……になる」形式に関しては、後に明治に統制される標準語として、性差・階層差に関係なく使用される言葉であるため、噺の中でも登場人物へのキャラ付けを意識することは無かった、あるいは、あえて色々な人物に使用させていたのではないかと考えた。

ただ、円朝の 3 作品を比較すると「お……になる」形式の使用率には明らかに差があった。『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』に比べて『文七元結』の使用率が低い。そこで、「仇討物」と「人情噺」という作風の違いに注目した。『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈驗』は「仇討ち」を主題としており、口演当時の人間にも通じる悪の否定や義理・人情を伝えた。また、『怪談牡丹燈籠』は噺を盛り上げるために、幽霊というどちらかというと非日常的な空想世界を盛り込み、当時の世の中の様子を直接反映させることには重きを置いていない。したがって、新語の「お……になる」形式を多く取り入れても物語の雰囲気は崩れない。一方、「人情噺」の『文七元結』は、義理深い、人情に厚い江戸っ子らしさをよりリアルに演じることが目的であり、江戸言葉を忠実に使用することが求められる。よって、新語の混入がほぼ無いのである。結果的に、「円朝自身が何を目的に口演するか」という点が、明治期の新語「お……になる」形式の使用の割合に大きく影響しているのではないかと考えた。

つまり、円朝速記本における「お……になる」形式の混入は物語の舞台背景を踏まえた調整が行われている。その使用のされかたは「お……になる」形式の語史が重視されている。また、作品の雰囲気を崩さない程度に使用されており、「お……になる」形式の混入具合は円朝による裁量が見られるのであるという結論に至った。

私は、今回の研究を通して、三遊亭円朝は落語を口演するにあたって自身の噺を精

密に作りこんでいることが分かった。新語の使用に関しては、その新語の語史や使用者の特徴を踏まえた上で忠実に使用しているように感じる。このような所に、円朝の慎重さ、堅実さを感じることができた。

円朝は、明治の文明開化を経験しており、彼の落語人生には明治政府による「寄席の統制令」が大きな影響を与えている。これをきっかけに円朝は国民教諭に積極的に動いたのである。須田（2017）には、

明治政府による寄席取締規制が進む文明開化期、『落語家中の親玉』円朝は、明治政府によって寄席教導化の中心に置かれていった。明治十九年（一八八六）、円朝は『落語家頭取』であるとして、警察書に呼び出され『成るべく一席にて勸善懲惡の判然する話を為すべし』との説諭をうける。かつて江戸には、参勤交代による地方武士が多く居住し、また周辺農村から流入した多くの奉公人もいた。それ以上に文明開化期の東京には、軍人・役人・書生もふくめ、地方から様々な人びとが多く移住して来た。さらに、松方デフレの時期には農村から貧民たちが押し寄せた。帝都東京の形成を拡大を背景に、大衆芸能の空間として隆盛を迎えた寄席は、国民教導の場（AIE）として位置づけられていく。

とある。『怪談牡丹燈籠』の口演の際は、鳴り物を使用した芝居噺を基調としていた円朝も、寄席の統制を機に、芸風を一変し芝居噺を辞めて、素噺に転向した。時間をかけて現地取材旅行をし、明治政府の意向を全て受け入れた勸善懲惡の物語『塩原多助一代記』を作り上げた。この作品への評価は、「現地調査・取材を綿密に行い、新作を創るという円朝の努力は、円朝の噺には“現実味”がある、という客の評価・期待を引き出した。」（須田（2017））とされている。しかし、説教くさく、現実世界との接点に欠ける『塩原多助一代記』という客の批評を意識して、江戸庶民の義理・人情・意気が満載された『文七元結』を発表したのである。『文七元結』に勸善懲惡は無く、円朝にとって新たな試みであった。円朝が明治政府に説諭を受けた明治十九年は「仇討物」「怪談噺」の『怪談牡丹燈籠』初出の1年後、同じく「仇討物」の『敵討札所の靈験』の初出の1年前であり、その後の意識改革として「人情噺」の『塩原多助一代記』や『文七元結』が誕生したという流れは非常に自然である。つまり、今回研究した円朝速記本『怪談牡丹燈籠』『敵討札所の靈験』と『文七元結』は時代の流れによって、円朝自身の落語への向き合い方が全く違うのである。「仇討物」2作品と、「人情噺」という作風の違いは、円朝の落語家として歩んだ軌跡によるものであり、明治政府や明治の民衆が関わるといっても過言ではないだろう。

新語の混入について考えてみる。「お……になる」形式は現代では一般的に使用される表現であり、誰でも、どこの場合でも、正しい使い方で使用さえしていれば非難されることはないだろう。円朝の口演による新語の使用は、現代で言えば、落語家が寄席の場で最近流行った言葉「流行語」を発した状況と類似しているのだろうか。その状況は、新語を知っておりその使用に肯定的な人、新語を知ってはいるがその使用には否定的な人、新語を知らない人、と混沌としているであろう。新語の使用には大き

なりリスクを伴うが、「笑い」が起きる可能性があるという面白さもあり魅力的だと思う。私は、「落語」は小説を超えて実態に寄る側面を持つ文化であると考え。多くの落語家が「落語は聴衆の皆さんとその場を一緒に創ることによって成り立つ」と言う。円朝の速記本に、「君」「僕」「お……になる」形式といった明治期の新語が現れたのは、円朝が「噺家」だったことは大きい理由になるであろう。

先述した通り、「お……になる」形式は、江戸時代後期に誕生した表現ではあるが、専ら使用されるようになったのは明治30年を過ぎた時期である。それ以前は、落語速記本や政治小説、新聞などで先行的に見られるようになるという歴史がある。円朝速記本は、「言文一致体」の手本として、二葉亭四迷の小説『浮雲』に大きな影響を与えた。このように、後世に役立つ文献は重宝される。当時「お……になる」形式は政治小説や新聞といった分野で扱われている中、円朝速記本のように物語の会話文で見られるのは馴染みやすかったのではないだろうか。このように、円朝の落語速記本は「言文一致体」の分野以外にも注目すべき所があると考えられる。

最後に触れておくこととして、円朝速記本に見られる「お……になる」形式は、速記者の速記や校訂の際によるものである可能性があるということを挙げる。しかし、速記本を研究するだけでは、そこに見られる表現が円朝によるものであるのか、速記者による校訂であるのかは分からない。これは、落語速記本を研究する者の宿命である。これを踏まえて、「君」「僕」「お……になる」形式といった新語の混入を考える。私は円朝自身が新語の取り入れについて告白していることや、調査したことによって明らかになった「お……になる」形式混入の特徴から、円朝自身が口演の際に、あえて新語「お……になる」形式を使用したのではないかと期待している。また、落語という聴衆を目の前にして演じる話芸だからこそ、その時代のリアルを意識した新語の取り入れに至ったのではないかと思うのである。

三遊亭円朝速記本に見られる尊敬語の新語「お……になる」形式は、噺を創ることにこだわり抜いた円朝の人生と、「落語」という聴衆を意識せざるを得ないという話芸の影響により、この形式が尊敬語として一般化される明治30年代以前から見られるようになった。また、新語の利用に関しては、複雑ながらより前向きな印象を与えるものであると強く感じる。そして、円朝の速記本は、言文一致体の手本として重宝されてきたという印象のみが強く、速記者による校訂の可能性があるという、文献研究にあたっては難しい一面もある。しかし、新語の混入という挑戦を通し、「噺」という作品を作るにあたっての覚悟を垣間見ることができるという点で新たな魅力を感じる。今回の研究では、新語の混入の仕方を調べることで、言語事象の語史的部分を知るだけでなく、円朝の人生や落語の性質に触れることができた。円朝速記本からの学びは尽きることを知らない。

注

- 1 藤浦敦『三遊亭円朝の遺言』（新人物往来社 1996年）
- 2 湯澤幸吉郎『増訂 江戸言葉の研究』（明治書院 1957年）

- 3 金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(株式会社岩波書店 2003年)
- 4 言文一致の趣意で書かれる文体。口語体。(日本国語大辞典)
二葉亭四迷は言文一致体の作品『浮雲』を書く際に、三遊亭円朝の落語を参考にしたと言われている。
- 5 代表されるものとして、野村雅昭『発達機能からみた落語の談話構造』(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四十二ノ三 1997年2月)、尾上圭介『落語の〈下げ〉の談話的構造』(『文法と意味Ⅰ』くろしお出版 2001年)などが挙げられる。
- 6 田中章夫「近世敬語の概観」(『敬語講座 4 近世の敬語』明治書院 1973年11月20日)
- 7 辻村敏樹「お……になる」考(『敬語の史的研究』東京堂出版 1968年10月30日)
- 8 原口裕「『お——になる』考」続招(『国語学 96号』国語学会 1974年)
- 9 湯澤幸吉郎『増訂 江戸言葉の研究』(明治書院 1954年4月30日)
- 10 「なさる」の変化した語。補助動詞として用いる。動詞の連用形や「御(お・ご)」を冠した語を受ける。…なさる。お…なさる。江戸時代、延享(一七四四～四八)頃から上方の遊里のことばとして見えはじめる。後期には江戸の遊里でも用い、一般の町家にも広がった。男性が用いた例もある。(日本国語大辞典)
- 11 須田努『三遊亭円朝と民衆世界』(有限会社有志舎 2017年)

参考文献

- ・今泉忠義『国語発達史大要』(白帝社 1939)
- ・加藤正信「全国方言の敬語概観」(『敬語講座 6 現代の敬語』明治書院 1973)
- ・金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店 2003)
- ・小林隆「あいさつ表現の発想法と方言形成」
(小林隆編『柳田方言学の現代的意義あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房 2014)
- ・須田努『三遊亭円朝と民衆世界』(有志舎 2017)
- ・田中章夫「近世敬語の概観」(『敬語講座 4 近世の敬語』明治書院 1973)
- ・辻村敏樹「お……になる」考(『敬語の史的研究』東京堂出版1968)
- ・辻村敏樹「明治大正時代の敬語概観」(『敬語講座 5 明治大正時代の敬語』明治書院 1974)
- ・原口裕「『お——になる』考」続招(『国語学』96号 国語学会 1974)
- ・飛田良文【ほか】『日本語学研究事典』(明治書院 2007)
- ・藤浦敦『三遊亭円朝の遺言』(新人物往来社 1996)
- ・『日本国語大辞典』(小学館)
- ・山崎久之『国語待遇表現体系の研究 近世編』(武蔵野書院 1963)
- ・湯澤幸吉郎『室町時代の言語研究一抄物の語法一』(大岡山書店 1929)
- ・湯澤幸吉郎『増訂 江戸言葉の研究』(明治書院 1957)

調査文献

- ・『円朝全集 第五巻』(岩波書店 2013)
- ・『円朝全集 第七巻』(岩波書店 2014)
- ・『政治小説集 一 新日本古典文学大系 明治編 16』(岩波書店 2003)
- ・『円朝全集 第一巻』(岩波書店 2012)

〈あおき きょうか／2020年日本語・日本文学科卒〉